

# 『一握の砂』を読む (三)

上 田 博

## 非凡なる人

47 手が白く  
且つ大なりき

非凡なる人といはるる男に会ひしに

初出『スバル』(明42・5)。この歌もご他聞にもれず、モデル探しのウルサイ歌の一つ。曰く高村光太郎、曰く尾崎行雄、曰く佐藤真一等等。いずれも決め手に欠ける。モデル探しのメリットは何か。モデルを特定することで、作者のある精神的動向が解ければ、モデル探しも捨てたものではない。以下、モデル探しに加わってみる。

結論を言えば、この歌のモデルは罌堂尾崎行雄である。明治四

十二年四月九日の日記に北村(橋)智恵子からの葉書にハユダテでの別離を回想し、釧路の坪仁子(小奴)からの手紙になつかしい気持を高揚させ、そうして日記の末尾に、

遠くで蛙の声がする。ああ、初蛙! 蛙の声で思い出すのは、五年前の尾崎先生の品川の家の庭、それから、今は九戸の海岸に  
にいる堀田秀子さん!

とある。『あこがれ』(明38・5)が東京市長尾崎行雄に献辞されてあるのは余りに有名。この処女詩集刊行直前に啄木は東京市庁に尾崎市長を訪問した、と金田一京助に話したという(『石川啄木』)。この頃、啄木は大隈伯との会見を夢見たり、東大教授姉崎正治(嘲風)に親交を求めたり、在米詩人野口米次郎に手紙を送ったり、啄木の『有名人病』が友人間に「石川は法螺吹きだ」(金田一)との悪評が立つほどであった。ところで啄木が一面識もない尾崎市長を訪問するについては、『太陽』主筆鳥谷部春汀の名人物評論が啄木の興味を引いたのではないか。春汀の『時代人

物月旦」が博文館から刊行されたのは明治三十八年四月十八日であり、この中に「尾崎東京新市長」論の一章がある。春汀は尾崎がジスレリーを気取っているという有名な話に、「少しも似て居る処がない」とすげなく、チエンバレンと比較される世評についても、チエンバレンは「理想家でなくて、実行家」である点、自分の主観的な理想よりも「時代の精神」を心得た真の政治家である点、尾崎は足許に及ばない、とこれまた手厳しい。「理想家」尾崎行雄は春汀の観察するところはこうである。

理想家に免れない短所は、常に自己に重きを置き過ぎる弊があつて、兎角時代の精神を看過するから、実行的手段には迂闊であるやうだ。此の社会を自己の理想通りに見たいと思ふのは、面白いことは面白いが、社会は自己の理想より進歩して居ることもあり、後れて居ることもあつて、平行して居ることは少ないものだから、理想家はドーかすると社会の孤児となるのである。

「理想と現実の乖離破綻」(明37・12・14、姉崎正治宛)の問に苦闘していた啄木が、「常に自己に重きを置き、したがって時代の現実にしぼしば「社会の孤児」視されるとする尾崎評に親密感を抱いたことは十分に頷かれることである。尾崎行雄と大養毅、進歩党の二人男。大相撲における梅ヶ谷と常陸山とならび称せらるる二大政治家は、大養の「実行的政治家」、対するに「理想的政治家」尾崎行雄、と評され、尾崎の名声は二十年後の昭和初頭においても、「奇誉を博すると共に、又奇識を得たる一世の名士」

(鶉崎鷺城『明治大正人傑伝』昭2・5、成輝堂書店)と記憶せられた。

一日、憲政記念会館内「尾崎行雄メモリアルホール」に、罌堂の三女相馬雪江氏を訪ね、罌堂の「手」について質し、メモリアルホールに掲示された罌堂の大きな「手形」を確めた。

47の「手が白く」の次歌以下六首を引く。

48 ここころよく／人を讀めてみたくなりにけり／利己の心に倦めるさびしき

49 雨降れば／わが家の人誰も沈める顔す／雨霽れよかし

50 高きより飛びおることとき心もて／この一生を／終るすべなきか

51 この日頃／ひそかに胸にやどりたる悔あり／われを笑はしめざり

52 へつらいを聞けば／腹立つわがころ／あまりに我を知るがかなしき

53 知らぬ家たたき起して／遁げ来るがおもしろかりし／昔の恋しき

④の歌に対しては、すでに③に「かなしきは／飽くなき利己の一念を／持てあましたる男にありけり」の歌が配されてあり、⑤に「それもよしこれもよしとである人の／その氣がるさを／欲しくなりたり」の歌が置かれてある。こうした歌には、自己批評が

△利己心△に呪縛される自身のありようを直撃して、62の歌に見るように他者との関係にも影を落す状況を生んでいる。自己批評の厳しさは△我△の実体を見据えれば見据えるほど強められてゆくのであって、ついに自己批評の苦しみから脱出を願う痛切が60の歌に示される。63の歌は、自己批評や自虐など、およそ自分の内部に向けられる棘のような自己視線を持たなかつた無邪気を懐しむ歌である。

64の歌は、

非凡なる人のごとくにふるまへる

後のさびしきは

何にかたぐへむ

64の歌と向き合う形で配置されてある。初出は「非凡なる人の如くにふるまへる昨日の我を笑ふ悲しみ」。初出歌は「非凡なる人」のようにふるまった△昨日の我△を「笑ふ」自分と、「笑ふ」自分を「悲し」む自分に分裂した自己認識が見られるのであるが、手離して△昨日の我△を笑えない心情に、「非凡なる人」のごとくにふるまった過去の自分に対するいささかの肯定が働いているのではないか。ところが64の歌へ改稿したとき、過去の自己と現在の自己の微妙な接合と裂け目が消され、あるいは二つの物語の時間の並行と交叉が、現在の時間に統合される。そうして現在の自己行為とそれに対する感情に一首が覆われる。平板な時間と平板な自己像が印象される。平板な自己像と言えば、64の歌も、白くかつ大きな手を持つ、「非凡なる人」に出会ったという、回想

の感情もまた抑揚のないフラットな印象と言わなければならぬ。一人人間といふものは何か知ら各自に庫を持つてるものだ。

昔の書生には『天下国家』といふ庫があつた。何の話でもそれに打込んだものさ。クリスチャンは『神様』といふ庫を持つてる。何でも自分の量見に了へない事があると直ぐ其庫の中へ持つて行くんだ。随分お手軽さね。(『紙上の塵』明43・8) かつて啄木もまた「随分手軽」な△庫△を持つていた。わが国の根本的の革命のために政治的天才、「一大理想的天才」(『波民村より』明37・4)を待望した。自身をそれに準らえることもした。

——六年後、啄木の人間観は「人間は皆赤切符だ」(「利己主義者と友人との対話」明43・11)とする人間観へと転回し、高山樗牛の天才主義、ニーチェの超人思想に傾倒した自身の過去をふりかえり、その時代の個人主義には、「人間の偉大に関する伝習的迷信」(『時代閉塞の現状』明43・8)がきわめて多量に含まれていた、と批判した。

64の歌は平淡な感情によって回想された歌である、と言っておいたが、64の歌の「さびしき」の感情については、いま一度味わい直す余地がある。「非凡なる人」のようにふるまった後味を「何にかたぐへむ」と自問するとき、自身の心のありようへの自省の感情の深さを示す、と言うだけでは物足りない。

神が否定され、「人間の偉大」信仰が「伝習的迷信」として否定されるとき、それではどのような人間像を自身のうちにイメー

ジするか。前掲「紙上の塵」に、すべての既存の〈庫〉を否定した現代人の持つ〈庫〉は何かと問ひ、

人間といふものは偉いものぢやないといふ庫だ。

と答えている。「面倒臭くなつて自分の理解力に堪へなくなるか、乃至は斯うすれば可いと解つても目の前に難儀の山が有ると、つい考へを其庫へ蔵ひ込んで了ふ」と説明する。〈信仰〉を持たないといふ〈信仰〉、これすべて「智識の食傷」(同)に由来する。

玉手箱を開けた浦島太郎の落胆か、否、真面目に言えば、「開放せられた自我」が同時に「幻影を失ひたる自我」(島村抱月「自己分裂と静観」『太陽』明43・2)のさびしさを味わなければならなかつた。64の歌の「さびしき」は、したがって、自然主義的落莫感に通ずる「さびしき」ではなかつたか。

47・64の「非凡なる人」の歌の前・後に、

46 腕拱みて

このころ思ふ

大いなる敵目の前に躍り出でよと

55 大いなる彼の身体が  
憎かりき

その前にゆきて物を言ふ時

を配置したとき、 $\Delta$ 非凡なる人 $\nabla$ をめぐる大きな波動が啄木の内部に発生していたことを暗示していたのである。

『一握の砂』を読む (三)

## 牛のよだれ

85 つかれたる牛のよだれは

たらたらと

千万年も尽きざることし

この歌は明治四十一年十月二十三日の日付の「歌稿ノート」に記された四十三首中の一首。『心の花』(明41・12) 初出、「浪淘沙」十九首の一首。

この歌の意味するところは、「あれこれ悩み思惟しているつもりでも結局はさして変化も意味もなく、だからだといつまで続かなか果てもない」自分の心を、「傍観的にながめた時の印象」(今井泰子)によつて歌つた歌と解される。この歌を如上の意味で「自己解析の歌」(岩城之徳)とすることに大筋で異論はない。問題は、テーマを表記する方法・モチーフに解明されるべき余地がある。

モチーフは「牛のよだれ」である。「牛のよだれ」は、疲れて緊張を失なつた心の単なる形容ではない。

坪内逍遙に「牛のよだれ」(『新小説』明38・9)という評論がある。ロマンチズムに代わる自然主義を諷刺的に論じたもので、主観や空想に対して、事実、経験、帰納、客観を重視する自然主

義は、「任意識病」に憑かれ、「神経衰弱の大流行、世間に青瓢軍のやうな男」ばかりが夥しく、彼らはその国、その時代の「最も薄手な人間」と見なされる。

自然派が好んで描く人物は、「仮面を被つた作家自身」であつて、「活物の人間問題」となると、「懷疑、不懷疑」と、煮切らぬこと夥しく、つづまるところは「底無しの井戸」へ落ち込むやうで、何一つ解決のためにはないと手敵しい。

「牛のよだれ」とはしたがって、「深刻な任意識の苦しみ」と称して、酒や女色に溺れる自堕落を売り物にする自然派に貼られたラベルである。二葉亭四迷はこの評論文の記憶を背景に、自身の文学的墮落の半生を描く方法について言及する。

近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の経験した具にも附かぬ事を、聊かも技巧を加へず、有の儘に、だら／＼と、牛の涎のやうに書くのが流行るそうだ。好い事が流行る。私も矢張り其で行く。

で、題は「平凡」、書き方は「牛の涎」。(『平凡』明40・10)

明治四十一年四月、北海道から海路東京入りした啄木に、まっ先に印象されたのは、「自然主義を罵倒する人間も、いつしか自然主義的になつて居る」(明41・5・3、日記)アイロニカルな現象であつた。この事実を「面白い話」(同)と高見の見物していたのも束の間、創作的生活の挫折と生活の苦痛に挾撃され、「生命その者に対する倦怠」(明41・7・18、日記)に墮ちなければなら

らなかつた。『明星』のリーダーと謝野寛の「老い」(明41・4・28、日記)を目標した啄木の悲しみは深かつたが、寛は最後の力をふり絞つて自然派に一矢を報いる戦いを挑んでいた。

疣<sup>いぼ</sup>ありて蝦蟇<sup>かま</sup>のすがたをいつはらずわれ珍重す流俗の歌  
(『明星』明41・8)

中皓氏は、この歌は『古今集』序文の「蛙も歌よみの仲間」という俚諺を連想させる、と言ひ、「近頃の世間一般の歌を私は珍しいものとし大切にしております。あの蝦蟇の気味の悪い疣までもちゃんと詠みこんであつて、醜い蝦蟇の姿を少しもいつわらず、醜さをありのままに歌おうとしている近頃の世間の歌をね。」との歌意をつけ、自然主義への「警拔で辛辣な比喩が面白い。」と評している(『与謝野鉄幹』桜楓社)。

「つかれたる牛のよだれ」の歌は、自然主義、あるいは自然主義的方法への揶揄に拠つて、自身の「生命その者に対する倦怠」感をテーマとする。「牛のよだれ」によつて倦怠感を形象すると同時に、自然主義に批判の目を向けながら、いつしか自然主義的デカダンスに浸潤されている自身への辛辣な批判の毒を含ませたのである。

## 水晶の玉

104 水晶の玉をよろこびもてあそぶ

わがこの心

何の心ぞ

106 大いなる水晶の玉を

ひとつ欲し

それにむかひて物を思はむ

理解困難な歌の一つである。何がむつかしいか、と言えば、もちろん「水晶の玉」についてである。今井泰子氏は(104)の歌について、

その美しい透明さ、完全な丸さが、濁り渦巻く作者の種々の思いをその玉に変えてゆくかに思われ「もてあそぶ」のである。興じている無心の状態をいぶかり悲しむ別の心が「何の心ぞ」と問う。

と解釈する。岩城之徳氏は右の解釈を承けて、(106)の歌について、「大きな水晶の玉に向かつて物思いをしたいという作者の気持を歌ったもの。水晶の透明な美しさに自己の悲しみを託す。」としている。いずれも苦心の解釈であるが、「水晶の玉」が「作者の種々の思いをその玉に変えてゆく」とはどういうことか。幻想、あるいは主観の産物といちおうはわかっているにしても、いまひとつよくわからない。混濁した不透明な作者の内面が、「美しい透明さ」をもつ「水晶の玉」を幻想のうちに呼び出したとしても、なお疑念が残る。それでは、(104)、(106)の歌は読者にメッセージの届かない、不出来の、あるいはナゾの歌なのか？

『一握の砂』を読む (三)

「水晶の玉」とは何か。村上春樹『THE SCRAP—懐かしの一九八〇年代』(文芸春秋)にこうある。

アメリカの雑誌を読んでいると、時々奇妙な広告にぶつかる。べつに奇妙じゃないと言われれば奇妙じゃないのだけど、やはり変だ。

たとえば『ニューヨーク』に載っている“Gazing Crystal” (水晶の占い球)の広告なんかそのひとつだ。しかし占い球といってもこれは決してオカルト商品ではない。七百九十五ドルもするれっきとしたクリスタルの装飾品である。直径は十二センチで、スレートの台座がついている。広告コピーによれば、「水晶球はそれの中に未来を見出すことができる」と信ずる多くの人々に対して、来るべきものの像を結びます。ストーリーベン社の水晶球は一点の曇りもなく、あなたを瞑想の世界に誘います」ということである。

“Gazing Crystal”、凝視する水晶、これは「水晶の占い球」で、その中に未来の像が現われる、というふれ込みの商品である。これを使う占師は、今日イギリスに非常に多く、彼らは「水晶を読む人」、または「水晶を見つめる人」と呼ばれる。占師は占いを求める人に、占いに入る前に完全に沈黙し、十五分瞑想を要求する。何も考えずに心を空にするようにという。レイモンド・カーヴァーの小説「メヌード」には、人生いかに生きるべきかの回答を得るために教師をやめて、「水晶玉覗き」に通いつめる女

性が登場する。日本の小説では川端康成に「水晶幻想」(改造) 昭6・1(同・7)という奇妙な短篇がある。自然科学者を夫にもつ、大の大好きの有閑マダムの幻想的意識の領域が全篇を覆っているのであるが、作品のテーマはよくわからない。作品のメッセージはよくわからないが、夫人の意識の一コマである次の断片が、今、必要である。

水晶の玉。ガラス。大きい水晶の玉を見つめてゐる。インドなのか、トルコなのか、エジプトなのか、東方の予言者。水晶の玉のなかに小さい模型のやうに過去と未来との姿が浮かび上つた、活動写真の画面。水晶幻想。玻璃幻想、云々。

(106)の歌。未来に対する不安。自己自身への懷疑。いつの時代、いつこの国の人間をもとらえて離さないテーマである。自分の明日がどんなものであるか、ちよつとでも覗いて見たいと願う心はだれにでもある。啄木のこの歌も例外ではない。へ大いなる水晶の玉に向き合つて、しばし瞑目し、そうして凝視する。そこに未来のイメージが浮かび上つてくることを切望する。へ水晶の玉が大きいれば大きいほどそのイメージは鮮明であるはずである。(106)の歌は、したがって啄木の未来への不安がイメージ化された歌と解釈してよいだろう。そうすると次の歌、

102 何もかも行末の事みゆるごとき

このかなしみは

拭ひあへずも

この歌についても、拭い去ることのできない自身の心の悲しみを、たしかな現在の手がかかりとして、自分の「行末の事」の予兆として感覺する、という意味の歌として理解することが可能になる。ところで(106)の歌は「手帳の中より」(東京朝日新聞、明43・8・4)と題して五首発表されたのを初出とする。

1 はたらけど働けど猶我が生活楽にならざりぢつと手を見

る  
2 耳掻けばいと心地よし耳を掻くクロボトキンの書を読み  
つゝ

3 何すれば此処に我ありや時に斯く打驚きて室を眺むる

4 とある日に酒を飲みたくてならぬ如く今日我切に金を欲  
りせり

5 大いなる水晶の玉を一つ欲しそれに対して物を思はむ  
生活に対する不安、自己の現実の淵源への省察(1)、自己自身への懷疑(3)の歌のしめくりに(5)の歌が配置される。こうした初出歌群の中に眺めてみても、(106)の歌のテーマとするところは動かない。

(104)の歌のもう一つの「水晶の玉」も同様であるが、この歌の初出は次のようであった。

水晶の玉をよろこび弄ぶ我がこの心ひとり嬉しむ

結句部を右のように「あそび心」に重心があつたものを、歌集では「何の心ぞ」と改稿した。(104)の歌ではまだ「へよろこびもてあそぶ」心が残されてあるが、結句を改稿することで自身の

心をのぞき込む方向へ歌の重心を移したのである。したがって(104)の歌は(106)の歌と同様の心情の上に立つ歌として読まれることが可能になったのである。

最後に。啄木は「水晶占いの球」のイメージをどこから仕入れてきたのか。先の川端康成の「水晶幻想」にそれが「活動写真の画面」とあったが、あるいは啄木も浅草の活動写真館で見たフィルムにあったのかも知れない。「水晶幻想」の「注釈」(長谷川泉)ではそれを不詳としてあるが、明治四十三年二月二〇日から、浅草の活動写真館で、「夢幻劇女手相見」と題する「最新珍写真」が映写されていたことが確認される。が、それとて今日、ストーリーの確めようもない。後日の課題としたい。

(うえだ・ひろし 本学教授)